

目 次

巻 頭 言

- 1 『飛翔』第2号発刊にあたって.....HIC 理事長・金川弘司

特 集

- 2 国際協力を通して思うこと.....JICA 北海道所長・松島正明

事業報告

- 8 2014 年度 第2回通常総会の開催報告
9 2014 年度 理事会開催報告
10 北広島緑ヶ丘小学校特別授業.....事務局長・向井博二
12 世界ふれあい広場 2014 参加報告.....事務局長・向井博二
14 JICA 青年研修
「ベトナム農村振興コース」に従事しての省察.....HIC 副理事長・熊井敬明

JICA 情報

- 37 動画のご紹介.....JICA 北海道／研修業務課長・瀧澤征彦
38 国際協力と市民参加.....JICA 北海道／市民参加協力課長・二見伸一郎
39 専門家稼業.....JICA 北海道／専門嘱託・笥 克彦
41 嵐の中平穏でいられること.....JICA 北海道／市民参加協力課・石崎貴大

寄 稿 文

- 42 再生可能エネルギーを生かした地方創生について.....
.....寒地土木研究所／寒地農業基盤研究グループ長・大内幸則
47 牛受精卵（胚）移植の実用化とその普及.....HIC 理事長・金川弘司
56 Pula! Botswana!!（後編）.....北海道留萌振興局・工藤得正
64 ブラジル・セラード農業開発と日系人の活躍について.....
.....北海道ブラジル協会会長・堀内一男
67 ソロモン奮戦記（ソロモン滞在記後日譚）.....日本水道協会・宮下妙子
71 医療制度と老い.....機会開発北旺株式会社／社長・百瀬 治
72 カンボジヤ体験記.....札幌国際大学3年・武石 凌

主な出来事

- 76 2014 年北海道・日本・世界の出来事.....事務局長・向井博二
80 編集後記

巻 頭 言

HIC 理事長 金川 弘司

私共の「NPO 北海道インターナショナル協議会、Hokkaido International Conference (HIC)」は、一昨年、前身の「北海道 JICA 帰国専門家連絡会」を引き継ぎまして、今年は 3 年目に入りました。この間、青年研修として「ベトナム農村振興コース」を 2 年間続けて参りました。その他にも、JICA を支援したり、青年海外協力隊 OB 会 (JOCV/OB) と一緒になって地域の国際交流のための色々な活動をし、世界ふれあい広場、国際協カフエスタおよび小・中学校や大学などへの出前講座を続けて、昨年 3 月には会報「飛翔」の創刊号を発行いたしました。

前身の「北海道 JICA 帰国専門家連絡会」時代の 20 年間には、北海道獣医師会をスポンサーにして、3 ヶ月に亘る「産業動物獣医技術研修コース」を立ち上げて、18 年間続きました。途上国 35 カ国から延べ 120 人の研修員を受け入れましたが、中には、この研修を受けて帰国後昇進したとか、あるいは畜産局長になれたとか多数の賛意も寄せられました。彼らが帰国後、それぞれの国の農業・畜産・獣医界で活躍し、その国の一次産業のレベルアップを推進してくれました。また、途上国からの「青年研修」事業も過去 10 年間に亘って続けて、30 カ国から約 300 人の研修員を受け入れてきました。会員の幅広い専門分野を生かしながら、経済・金融、観光、中小企業、環境、自然保全、農業・農村振興および IT 関連などの色々な分野の研修を続け

て参りました。

継続は力なり！ 一人ひとりの力は小さくても、獣医技術研修コースを 18 年間も続けて来られたことや、10 年以上も続いた「青年研修」は大きな力となって、やがて大きな国際貢献に繋がったと自負しております。

幸いなことに、HIC は、帰国専門家連絡会を引き継いで、それぞれの分野の専門家集団であります。いろいろな専門分野を生かして、これからも地域社会の国際化と途上国のいろいろな問題解決に貢献ができればと思いますが、残念ながら、HIC に移行しても、前身の「北海道 JICA 帰国専門家連絡会」の高齢化・老齢化・マンネリ化などから脱却することはできず、さらに会員数も伸び悩み、HIC 独自の国際協力事業にも手が届かず、暗中模索状態が続いております。専門家だけに留まらず、もっと若い力に期待をしたいと思っておりますので、多くの若い方々に HIC の会員になっていただいて、国際協力や国際交流などのイベントや講座を企画し、国際交流の架け橋になっていただければと思っております。

地球は一つ、世界各国とのつながりを大切にしながら、HIC の機関誌「飛翔」に相応しく、世界に目を向けて空高く飛び上がり、力強く、世界に羽ばたくことを願っております。

「国際協力を通して思うこと」

JICA 北海道国際センター 所長 松島 正明

北海道インターナショナル協議会の皆様には、常日頃 JICA 事業に対して暖かいご理解とご支援を頂き、厚く御礼を申し上げます。HIC には、各分野における豊富な経験・知見を踏まえて、長年に亘り開発途上地域で活躍された皆様が多数参加されており、今でも道内各地で国際協力や市民活動を続けておられることに、あらためて敬意を表する次第です。

「飛翔第2号」の発行に際し如何なる話題を提供すべきか聊か思案したところですが、昨年我が国 ODA が 60 周年を迎え、従来の「ODA 大綱」が新たに「開発協力大綱」へ見直されたこと及び本年が青年海外協力隊創設 50 周年という、いわば区切りの時期でもあるため、私自身がこれまで携わってきた国際協力を通じて思うことを徒然に纏めることと致しました。

JICA でのこれまでを振り返れば、在外赴任を 4 回(フィリピン、バングラデシュ、アフガニスタン、イラク) 経験し、本部では開発調査、無償資金協力、企画、総務及び青年海外協力隊に関する業務を担当してきました。この間、出張で訪れた国は約 100 カ国に上ります。各部署で巡り合った専門家、ボランティア、NGO/NPO、省庁、自治体、大学・研究機関、コンサルタント企業等の皆さんには大変お世話になり、いまだにお付き合いが続いていることを思うと、つくづく我が国の国際協力は各分野の皆さんの支援で成り立っていることを実感します。

約 20 年前の赴任当時、世界最貧国と言われたバングラデシュは、道路や橋梁等経

済インフラの整備が急速に進み、ユニクロなど本邦企業も数多く進出するなど目覚ましい発展を遂げたことに素直な驚きと喜びを感じますし、出張で訪れた地域の中でも、特にアフリカ地域における経済発展及び国際社会での発言力増大には目を見張るものがあります。これらの国における経済・社会発展がすべて我が国援助の成果とは必ずしも言えないものの、戦後の国際社会において我が国が果たした役割はそれなりに大きなものであったと言えます。東日本大震災の際に 160 を超える地域・国から被災地に対して多くの支援が届けられたことは、その証左であると思います。

アフガニスタンに着任した 2004 年は、旧ソ連の撤退後に起きた内戦が一旦収束したものの、憲法は未策定のままであり、国内各地域では依然軍閥の支配が続き、各地で軍閥間の小競り合いや米軍を中心とする多国籍軍に対するゲリラ攻撃が多発する状況でした。私の宿舎付近にも一晩で 10 発を超えるロケット弾が着弾したこともあります。幸いロケット弾の狙いが不正確であったため事なきを得ましたが、かかる状況において JICA は紛争の傷跡が数多く残る首都カブールに拠点を設置し、内戦により破壊された道路、医療、教育施設等の緊急復興に取り組みつつ、紛争で失われた各分野の人材を育成するため、数多くのプロジェクトを実施しました。

当時の事務所体制は私を含めて事務所員 3 名のみで、事務所も古い一軒家であったため、自ら所内のペンキ塗りや電球の取

り付け、インターネット設備の設置等をやりながら、緊急復興のために派遣された最大約 80 名の専門家、コンサルタント等に対して外出禁止、徒歩禁止、買い物禁止など様々な行動制限をかけながら安全対策に留意していました。関係者の安全確認のために毎晩 20 時に無線を使って「点呼」を繰り返し、応答がない場合は自宅に向いて安否を都度確認する日々が続きました。応答がないために数名で当該者の自宅に駆けつけたところ、酒を呑んで既に就寝中だったことも一度や二度ではありません。また、国内には信頼に足る金融機関がまだなかったため、毎月国連機でパキスタンに出張し、イスラマバードに開設した銀行口座から引き出した多額の現金 (USD) を胴巻きに入れて、強風を受ければ木端微塵になりそうな小型セスナで往復していました。時には数十万ドルを持ち歩いたので、「もしこの飛行機が墜落したら弁償？まだ住宅ローンが残っているのに！」とビクビクしたことを懐かしく思い出します。

国内各地域に割拠する軍閥の軍隊解体 (武装解除、動員解除、社会復帰：DDR) も困難な仕事でした。各軍閥が有する重火器等の武器を回収し、動員を禁止することだけでも困難な上に、解体によって発生する多くの民兵を如何に自立・生活させるかが重要な課題であったため、国連や他ドナーと毎日のように会議を開き、各ドナー連携の下旧民兵を教員、大工、エンジニア等に育成する職業訓練も実施しました。当時の JICA 理事長は緒方貞子氏 (現 JICA 顧問) で、同氏は理事長であると同時にアフガニスタン支援に関する日本政府特別代表という立場でもあったため、緒方理事長が出張される度に「DDR の進捗状況如何、国内避難民への支援はどうなっているの

か、スピードが遅い」等、毎回お叱りを受けました。

振り返るとアフガニスタンでの仕事は、JICA のあらゆる道具を使い、組織横断的な体制を組みつつ、柔軟かつ的確に相手のニーズに即応することが求められると同時に、関係者への安全対策に配慮しながら、スピード感を持って業務をこなすことが必要であったため、「普通の JICA マン」では決して経験できない、大変貴重なものでありました。大使館との関係においても、当時の在アフガニスタン特命全権大使駒野大使は、外務省屈指のペルシャ語のエキスパートで経済協力にも明るい方でしたが、たまたま私の大学の先輩でもあった関係で、国内各地での機材引き渡し式等に何度も随行させて頂きました。現地語のダリ語はペルシャ語と共通点が多くあり、大使もダリ語を流暢に話されたため、大使のスピーチを聞いたアフガン人が、「さすがは日本だ、大使にアフガン人を採用するなんて！」と真顔で言われたことも楽しい思い出です。

2009 年にはイラクに事務所を設置せよとの命を受け、2 名の若手職員と共に再び 3 名の少人数で現地入りしました。当時のイラクはサダムフセイン前大統領の拘束後に発足したマリキ政権が動き出した頃で、未だ各地で民族間・宗派間の争いが頻発していた時期でした。バグダッドに事務所を設置するには治安状況が悪すぎたため、赴任直後の事務所はイラク北部のクルド特別自治区にあるエルビルに設置しました。アフガニスタンでの事務所立ち上げの経験が生かされたことは言うまでもありません。

クルド人はイラク、イラン、トルコ、シリア及びアゼルバイジャン等に 30 百万人

ほど住んでいます、これほどの人口を抱えながら世界で唯一独自の国家を有しない民族と言われています。1946年旧ソ連の後押しで、現在のイラン北部で「クルディスタン共和国」として独立したのですが、旧ソ連の撤退後わずか11か月で共和国は崩壊、現在の姿になっています。私が初めに事務所を設置したエルビルはクルド自治区の中心地で、自治区のバルザーニ大統領の強力なリーダーシップにより経済状況も活況を呈していました。

JICAの出張でイラクにおいでになったジャーナリスト池上彰氏は、「エルビルは中東における第2のドバイのよう」と表現されましたが、ペシュメルガと呼ばれるクルド精鋭部隊により治安は安定し、原油や天然ガス等天然資源開発のためにトルコ、韓国など外資導入に積極的に取り組んでいました。市内には大規模スーパーが数多くあり、仏資本のカルフルなどもありました。クルド人の大半がイスラム教徒ですが、大らかな宗旨らしくアルコールもタバコが自由に手に入り、外資系高級ホテルでは一応「握り寿司のようなもの」も食べられました。

JICAは2008年までイラク国内に拠点を有しておらず、ヨルダンからリモートコントロールで円借款、研修員受入れなどを実施していましたが、エルビルに拠点を開設してからは、農業分野の技術協力を立ち上げ、専門家派遣も開始しました。緒方前理事長が上智大学の教授からUNHCR代表となった当時の初仕事は、サダムフセイン前大統領から迫害を受けたクルド難民の救済で、自ら難民キャンプ入りして国境を封鎖してクルド難民を受け入れなかったイラン、トルコとハードな交渉をされた経緯があったため、新たにJICA理事長と

してクルド入りした時は、クルド地域を含むイラクの復興に向けて並々ならぬ意欲を抱きつつ、感慨深げな表情で到着されたことを昨日のこのように思い出します。仕事ではアフガン同様幾度も怒鳴られました。

その後、エルビルから毎月飛行機でバグダッド入りし、日本大使館の支援を得ながら事務所の候補物件巡りをしました。当時のバグダッドは市内各所で自爆テロや外国人の誘拐等が頻発していたため、随所に米軍によるチェックポイントが設置され、その関所を通るたびに荷物をすべて開けられた挙句、45度を超える炎天の下汗だくになりながら爆弾犬が車両と荷物のチェックを終えるのを待たされました。関所チェックは後に米軍からイラク国軍に移管されましたが、イラク軍による爆弾チェックの方法は爆弾犬に代わり、英国の会社が開発した「ダウジング」によって爆弾を検知する機械（1台約500万円）で行われました。「ダウジング」は地雷探知や地質調査等で稀に使われるようですが、イラク国軍が英国の会社から数百万ドル分購入したその機械はやはりインチキであったことが判明し、国会で大問題となりました。

我々にカラシニコフ（AK47）の銃口を向けて、髭もじゃの若いイラク人兵士が真剣な顔つきで、その機械を手に車両の周りをウロウロするのを見て必死で笑いをこらえていましたが、敏感に商機を捉えてアフガンとイラクにまがい物売りつける英国企業のしたたかさと、イラクのお人好し具合を思い複雑な感覚を覚えたものでした。後日逮捕された英国企業のトップは元警察官だったそうです。

バグダッドの本事務所は着任1年後に市内グリーンゾーン（チグリス川沿いで、

大統領府や各国大使館がある地域)内に開設しました。当時は移動に際しては民間の警備会社が少なかったため米軍に護衛を依頼していましたが、ヘルメットと防弾チョッキを付けると総重量 15 キロほどになり、冷房が効かない装甲車の中でいかつい米軍兵に囲まれて長時間移動するのはなかなかの重労働でした。装甲車の中で私の息子とほぼ同世代の若い米兵に対して、「田舎はどこ？親御さんや恋人とは連絡しているの？」などと雑談をしたものです。

戦闘による米軍の死者数は、アフガニスタンで約 2,500 名、イラクで約 5,000 名となっており、あの時の兵隊さんは無事に本国に戻ったかどうかと今でも思い出します。アフガニスタン、イラクで亡くなった一般市民は一説によれば 14 万人を超えていると言われており、両国で私もナショナルスタッフや知人を失っていますので、あらためて戦争の悲惨さ、残酷さを実感します。

アフガニスタン、イラクの「その後」について話を移します。アフガニスタンではカルザイ前大統領の退任後、大統領選をめぐる民族間の対立が再び起こりました。旧ソ連相手に戦ったタジク人中心の北部同盟出身者で、前外務大臣の「アブドゥラー・アブドゥラー」氏と、パシュトゥン人で世銀勤務から財務大臣を経験し、カブール大学長も歴任した「アシュラフ・ガニ」氏による一騎打ちとなり、最終的にはガニ氏が新大統領となりました。アブドゥラー氏は最後まで開票結果に疑義を唱え、結果的には首相格の行政長官として落ち着きましたが、最近発表された閣僚名簿を見ると両陣営による痛み分けの様相です。当初からある程度想定していたものの、両陣営の精神的なシコリが新政権に如何なる影響を与えるか、今後の動静が気になるとこ

ろです。

ガニ新大統領は私が赴任中幾度もお会いしていますが、カルザイ政権下の財務大臣として、地方に割拠し続ける軍閥の親玉と命がけの直接交渉を行い、麻薬取引等不正行為で軍閥が蓄財した現金を奪い取り、自らアタッシュケースに積み込んでカブールに飛行機で戻ってきた猛者であり、英語も達者、世銀出身者だけあって復興にかける意気込みも相当なものがあります。一方のアブドゥラー新行政長官も外務大臣当時私も数回お目にかかりましたが、旧ソ連相手に北部同盟の中心人物として戦った勇敢な戦士の割には、英語も達者、いつも仕立ての良いスーツを纏って、国連、ドナー相手に堂々と渡り合うことができる国際派であるため、新アフガニスタンの発展のために、両者が早期に協力関係を築いて頂くことを期待しています。

イラクでは、前マリキ首相が就任後にシーア派中心の内閣を作り上げ、対立するスンニ派閣僚を次々と排除したことに対する国内での不満が高まりつつあったこと、及び隣国シリアの混乱に乗じて急速に台頭した「イスラム国」の拡大により、マリキ政権は昨年辞任に追い込まれました。私の赴任中も少数派であるスンニ派の不満、クルド自治政府に対する政治的圧力、若年層の失業率悪化、イランとの接近、電力・上水等インフラ整備の遅延等、政権交代の材料が山積だったため、いつかはこうなると思ってはいましたが、現在の状況を見てもっと早く手を打って欲していればと残念に思います。イラク新政権は、スンニ派、クルド系及びその他少数派勢力も均等に取り込んだ挙国一致内閣を作るべく進んでいるようですが、クルド人の悲願である独立の火種は消えておらず、今後も紆余

曲折があることが予想されます。イラクは確認埋蔵量で世界第4位の原油産出国であり、我が国にとって重要なパートナーであるため、JICAもイラクの復興・発展に向けて更に注力することが肝要です。

アフガン、イラクのみならず、JICAはルワンダ、ミャンマー、スリランカ等多くの地域で平和構築支援に取り組んでいますが、その先駆的取組として期待されたアフガン、イラクの現状を見ると、私自身現場で苦労してきたことは一体何だったのかと思うことが時としてあります。確かに平和構築支援は簡単ではなく、長い間続いた民族間、宗派間等の紛争、シコリを解きほぐして新たな枠組みを構築することは大変な仕事で長い時間を要しますが、現在世界の各地域で平和構築に取り組む同僚達に対しては、「慌てず、焦らず、あてにせず。而して飽きずに、諦めず」とのエールを送りたいと思っています。たとえ「いつかはこうなる」と思ったとしても。ちなみに「慌てず～」のフレーズはインドネシアで警察支援を行ったJICA専門家山崎裕人氏（元警察庁）が読売新聞に寄稿していたもので、平和構築支援のみならず須らく国際協力に携る者の心構えを示す言葉として最適と思います。

最後に、最近の日本及び日本人について、国際協力の現場仕事をしてきた立場として気になる点に触れたいと思います。

一点目は日本人の「安全に対する感覚」についてです。昔の日本は「安全と水はただ」という感覚があり、海外旅行時の無防備な行動や不十分な健康管理について、注意喚起が盛んに行われた時期がありました。その効果もあり、健康管理に関しては「海外では水道水をそのまま飲まない」等留意事項が相当浸透し、安全な水へのアク

セスや重要性についても理解が深まったと感じています。他方「安全」については如何でしょうか。路上や駅のホーム、階段等でスマートフォンを見つめながら歩いている方が実に多いことか。人によってはヘッドフォンをしてスマホと睨めっこしながら歩いています。最近我が国では危険ドラッグ服用による暴走車による交通事故が増えており、通り魔的な犯罪も後を絶ちません。そんな環境の中でヘッドフォンをしてスマホを見ながら歩くことは、視力、聴覚を絶ったまま無防備の状態にいることに他ならず、極めて危険な行為だと思います。他国でも似たような光景を見かけますが、日本に比べれば圧倒的に少ないと言えます。日本は夜間女性が一人歩きをしても比較的安全ですから、安全感覚が麻痺しているのだと思いますが、多くの日本人がもっと世界を知って「五感を使って自分の身は自分で守る」訓練を身に着けることによって、悲惨な事件や事故を相当程度防ぐことができると思います。

二点目は「思いやりの精神」です。古くから日本では親、師及び年長者を敬い、家族、友人との関係を大事にし、贅沢を控え、物を粗末にしない等、家庭内での躰が当たり前のように行われていました。時代が変わると言えば元も子もありませんが、最近目立つ育児放棄、児童虐待は言うに及ばず、実の親が亡くなったにも関わらず葬儀も行わず平気で親の年金受給を続ける事件まで起きています。電車に乗ってお年寄りが目の前に立っていても平気で寝たふりをする人、自らの存在を認めてもらうために犯罪を起こす人、家の躰不足を学校のせいにするモンスターペアレント、お年寄りが爪に火を灯して貯めた貯金を掠め取る輩等、「相手の立場など関係ない、自分が

大事」と考える人が急増しているような気がしてなりません。このような事件が起きる度に原因を「社会の問題」に求める傾向がありますが、日本人の考え方自体に変化が起きているのではないかと危惧しています。中東、大洋州、中南米、アフリカ、アジアどこに行っても一般犯罪はつきものですが、お年寄りや子供など弱い立場の人を狙い撃ちするような犯罪は殆ど聞きません。「昔の日本にあって、今はなくなってしまったもの」をあらためて開発途上国から学ぶ必要があると思います。

三点目は「好奇心、ハングリー精神」に関することです。開発途上地域に行くと、日本とは人口動態も異なり、若年層の失業率も高いためか、あちらこちらに若者が溢れています。皆「ぎらぎら」した目をしています。「ぎらぎら」の意味は人によって「隙あらばあの旅行者から金を盗もう」であったり、「いつかは金持ちになってやるぞ」であったりでしょうが、押しなべてパワーあふれる目付きをしています。他方、最近の日本人の目はどうでしょうか。「死んだ魚の目」をしている人が多く、力漲る目付きの方を見かけることは少ないよう

に思います。戦後復興期は「24時間働けますか」型が多く、バブル期には「遊びに夢中」タイプが多かったのですが、良くも悪くも誰もが物事に一心不乱に取り組んでいる様子が見られました。少子高齢化、人口減、大都市への人口集中及び「消滅都市」の懸念等、様々な課題を抱える我が国で、まさにこれから日本再生・北海道の活性化に向けた創意工夫が求められるなか、「死んだ魚の目」で良いわけがありません。途上国では、学校に行くために懸命に家の手伝いをする子供、家族を養うために身を粉にして働いてようやく1ドルを稼ぐ親など、苦しい環境下でも明確な目的意識を持って毎日を懸命に生きている人々が多く、難しいと分かっているにもかかわらず決して諦めない逞しさを感じます。「足りないもの」がなくなった今の日本に途上国並みのハングリー精神を求めるのは難しいと思いますが、現在の自分に満足することなく、更に上のレベルを求めて努力する意欲と飽くなき好奇心を取り戻すことが、今そしてこれからの日本に必要なのではないのでしょうか。

以上



第2回通常総会報告

1. 開会日時
2014年06月21日(土)15時00分
2. 場 所
札幌市白石区本通16丁目南4-25
JICA北海道国際センター(札幌)
ブリーフィングルーム
3. 議事の審議
 - 第1号議案 2013年度事業報告書
 - 第2号議案 2013年度収支計算書
 - 第1号第2号議案一括説明の上審議了承
 - 第3号議案 2013年度監査報告
- 監事より適正処理報告
- 第1号、第2号、第3号議案可決
- 第4号議案 2014年事業計画
- 第5号議案 2014年収支予算計画
- 第4号第5号議案一括説明の上審議了承
- 第4号第5号議案可決
- 第6号議案 役員の選任
以上、議案通り可決
4. 閉会日時
2014年06月21日(土)16時55分

2014年度理事会の開催報告

第1回理事会

1. 日時
4月26日(土)15時00分~18時00分
2. 場所
JICA北海道国際センター2階 会議室
3. 議題
 - (1) 2014年通常総会の開催について
総会開催の日時・場所の決定
 - ① 6月21日(土)15時00分~16時
 - ② JICA北海道国際センター2階会議室
 - (2) 2013年度事業報告について
 - ① 2013年度理事会開催報告
 - 2013年04月12日(金)
 - 2013年04月27日(土)
 - 2013年05月18日(土)
 - 2013年05月29日(土)
 - ② 2013年実施事業の報告
- 7月23日 北広島緑ヶ丘小学出前講座
- 2014年7月26日/設立記念講演
- 2014年07月29日/拓殖大学北海道短期大学/国際協力出前講座
- 2014年8月31日/世界ふれあい広場
- 2014年9月30日~10月17日/青年研修ベトナム農村振興コース
- 2014年10月20日/北海道国際協力フェスタ
- 2014年11月29日/都大学国際交流出前講座
- 2014年03月24日/会報誌の発行
- (3) 2013年度会計報告
- (4) 2014年事業計画案の提案

- ① 支援活動計画
 - 拓殖大学北海道短期大学国際協流出前講座
 - 世界ふれあいひろば
 - 北海道国際協力フェスタ
 - 北広島緑ヶ丘小学校出前講座
 - 道都大学国際交流出前講座
- ② 2014 年度青年研修事業応募
 - 会報誌の作成
- ③ 草の根技術協力事業
 - ベトナム農村振興にかかるプロジェクト調査
- (5) 2014 年度会計予算説明
 - ① 支援活動費予算請求説明
 - ② 青年研修に係る予算説明
 - ③ 会員会費に係る予算説明

第 2 回理事会

- 1. 日時
 - 2014 年 09 月 13 日(土) 10 時 00 分~12 時 00 分
- 2. 場所
 - JICA 北海道国際センター2 階 会議室
- 3. 議題
 - (1) 2014 年事業報告
 - ① 2014 年 07 月 16 日/拓殖大学北海道短期大学・国際協流出前講座
 - ② 2014 年 07 月 22 日/北広島緑ヶ丘小学校出前講座
 - ③ 2014 年 08 月 30 日/世界ふれあいひろばへの参加
 - (2) 事業経過報告
 - ① 2014 年 09 月 23 日~10 月 11 日/青年研修ベトナム農村振興コース受託による経過報告

第 3 回理事会

- 1. 日時
 - 2004 年 12 月 05 日(金) 15 時 30 分~18 時 00 分
- 2. 場所
 - JICA 北海道国際センター2 階 会議室
- 3. 議題
 - (1) 2014 年度の事業計画と執行状況
 - (2) 2014 年度青年研修事業の実施概要
 - (3) 会計状況報告
 - ① 会費納入状況
 - ② 支援経費の状況
 - ③ 受託業務の収支状況
 - (4) 草の根技術協力にかかる企画書の作成
 - (5) 会報誌の編纂発行について

北広島市立緑ヶ丘小学校特別授業

HIC 理事・事務局長 向井博二

北広島市立緑ヶ丘小学校特別授業を平成 26 年 7 月 23 日(水)午前 10 時より午前 11 時まで 4 年生を対象として実施いたしました。

授業については、北広島市立緑ヶ丘小学校より特別授業の以来を受けたものです。

講師は北海道インターナショナル協議会理事長、北海道大学名誉教授の金川弘司先生にお願いいたしました。

北海道インターナショナル協議会の副理事長熊井敬明、事務局向井博二が、講師補助を務めました。

なお、北広島市立緑ヶ丘小学校からは、緑ヶ丘小学校 校長、教頭、担任教師、4 年生 31 名の参加となりました。

授業の目的は、北海道とかかわりの大きい代表的な野生動物で、最近市街地への出没情報もあり、生徒たちの関心も高まっているヒグマの生態を教えることです。

昨年度も 4 年生の特別授業として学校から依頼があり、授業を実施しました。今年も例年通り学校は、この特別授業を年間カリキュラムと位置づけし、この授業実施を行っています。

金川先生の授業プログラムは、スライド映写と説明、持ち込み展示物の説明、生徒からの質問に対する回答の順番です。授業の内容は、以下のとおりです。

(1) スライドを利用して生徒にヒグマの分布状況、日常の生活、季節毎の生活を説明、動物と人間の共生について説明をしました。

(2) ヒグマは、雑食のため、人間の捨てた食べ物もたべるため、特にキャンプや、レクレーションの時は、食べ物の放置をしないよう説明をしました。

(3) 実際のヒグマのはく製、ヒグマの爪、ヒグマの食物(コクワ、クルミ等)の見本、オオカミの頭、鹿の頭を展示し、それぞれについて説明しました。

(4) 生徒からの質問内容は、ヒグマの体重、ヒグマの食べ物の食べ方、ヒグマの 3 歳を人間に当てはめると何歳か(10 歳)、ヒグマに出会わないようにする方法など多くの質問がありました。

この授業による生徒たちへの効果は、以下の通りです。

① ヒグマの生態を理解しました。

② ヒグマは、日本一大きな動物であると理解しました。

③ ヒグマが身近なところに出没していることは、人間にも少し責任があると理解しました。

④ キャンプやハイキングなどレクレーションで山に入ったときは、ごみを含めその場に投げ捨てず、持ち帰ることが大切と理解しました。

概ね、私たちの考えていたことを理解したものと満足感をもって終了しました。

野生動物と人間とのかかわりは、世界中変わりはないものと思います。

4 年生のみんなが、世界中の自然や環境について少しでも関わってもらえると嬉しいものと思っています。



写真-1 授業終了後全員で記念写真を撮りました



写真-2 ヒグマの親子



写真-3 雄鹿

世界ふれあいひろば

HIC 理事・事務局長 向井 博 二

平成 26 年 08 月 30 日毎年恒例の世界ふれあいひろばが、JICA 札幌（札幌市白石区本通 16 丁目南 4 番 25）にて開催され、北海道インターナショナル協議会も参加しました。

主催は、独立行政法人国際協力機構北海道国際センターで、午前 10 時より午後 4 時までの時間、「札幌に滞在している世界各国からの外国人の方と交流しよう！」「アフリカ、アジア、中南米などとの JICA 研修員とお友達になろう！」というコンセプトのもと、体育室でのゲーム、ブース展示による文化交流、外国人および日本人ステージパフォーマンスが行われました。

当日の総参加者は、950 名（主催者発表）であり、コンサドーレ札幌マスコットキャラクターの「ドーレ君」や、白石区マスコット「しろぴー」の参加によりイベントは、盛り上がりました。

NGO 等ブース出展団体は、当協議会を含め 14 団体でした。

ステージパフォーマンスは、11 団体で午後 2 時から午後 4 時まで各国の民族ダンス、太鼓、ドラム、の披露がありました。

北海道インターナショナル協議会は、昨年同様に今年も、書道講習と書道作品展示で本企画に参加しました。

書道講師は、当協議会の会員である鈴木千嘉子先生とお弟子さん 4 名の参加により、外国の人たちと交流を図りました。

なお、当日当協議会の会員 6 名の方に協力をいただきました。

そして、日本人、JICA 外国研修員、札

幌在住外国人の方々と日本の伝統文化である書道を通して異文化交流、国際交流をはかりました。

交流の図り方は、ブースに、テーブルを設置し筆、墨、半紙を用意し、講師および参加日本人の指導、会話を通して文字を書いてもらいました。



写真-1 始まる前のブース



写真-2 日本人スタッフ

ブースで熱心に参加していただいた外国人は、マリー、マレーシア、ベトナム、モンゴル、タンザニア、スーダン、ルワン

ダ等 30 名の人たちです。



写真-3 外国の人が参加しています

アピールし、イベントに沢山のひとに来てもらい、外国の人たちとコミュニケーションをしてもらうことです。

来年もまた本企画に参加しようと思っています。

ワ	ト	イ	わ	こ	い
カ	チ	ロ	か	ち	ろ
ヨ	リ	ハ	ふ	り	は
タ	ヌ	ニ	た	ぬ	に
レ	ル	ホ	れ	る	ほ
ソ	ヲ	ヘ	そ	を	へ



写真-4「ドーレ君」です

主に母国語や日本語の「かな」などを中心にして、本人の名前を半紙に記入し、記念に持ち帰ってもらいました。大変よろこばれました。

このイベントによる活動効果は、文化の懸け橋としての書道を通して国際交流ができたことです。

さらに、外国の人たちは、母国へ帰って日本の経験を伝えてもらえると、スタッフ一同確信しました。

また、外国の人からは、民族衣装の披露をいただき、普段接点がない我々スタッフや日本人の参加者は、素敵な民族衣装に感銘を受けました。一方、当スタッフも和服姿を外国の人たちに披露しました。

課題は、本企画をもっと多くの日本人に



平成 26 年度 JICA 青年研修事業

「ベトナム農村振興コース」に従事しての省察（その2）

HIC 副理事長 熊井 敬明

1. はじめに

JICA 北海道が平成 26 年 4 月 26 日に公告した「平成 26 年度青年研修事業」のコース案件数は Table-1 に示す通り、昨年と同数の 7 件であった。

その公告案件コースの中には、昨年度に受託した同じ案件の「ベトナム農村振興コース」が含まれていたことから、HIC としては昨年度の実績や経験を踏まえ、より一層の研修効果が発揮できるような研修に改善できるとして、躊躇することなく「ベトナム農村振興コース」の提案企画書を作成して応募した。その結果、審査による決定通知を受けて研修を実施した。

研修プログラム企画書の作成や研修実施に際し腐心した点は、① ベトナム農村振興の課題に適合する「カリキュラムの構成」、② 講師に対し個々の研修カリキュラム内容の趣旨を理解してもらうとともに研修員が事前に研修プログラム構成

カリキュラム内容を的確に把握できるようにするための「シラバスの作成」、③ 研修員に対し事前準備研修の位置付けとして研修受講の際に必要な的確な情報を提供するための「プログラム・オリエンテーションの教材作成と内容解説」を実施したことである。

また、研修実施の中で、研修員がベトナム農村振興に係る講義科目や施設見学において、研修員からの不明や理解不能などの疑問に対する的確に対応したことや、研修員から研修内容に対する要望や意見などの評価について以下に省察する。

2. 「ベトナム農村振興コース」の公告内容に対する企画書の作成

企画書の作成にあたっては、「会報増刊号」でも以下のように触れている。

作成課題は、「対象国の対象分野における現状の問題点を如何に認識し、その問題点を解決するためには何を中核として

Table-1 平成 26 年度 JICA 北海道の公告の青年研修事業一覧

国・地域	分野	案件コース名	受入研修員数	使用言語
タイ	教育	職業訓練教育	14 名	タイ語
ベトナム	農業開発・農村開発	農村振興	16 名	ベトナム語
アフガニスタン	保健医療	感染症対策	18 名	ダリ語
中央アジア・コーカサス混成	ガバナンス	地方行政	11 名	ロシア語
中央アジア・コーカサス混成	民間セクター開発	経済行政(産集振興位)	14 名	ロシア語
アフリカ(英語)	教育	職業訓練教育	18 名	英題
イラク	ガバナンス	行政管理	9 名	アラビア語

カリキュラムを設定するか)、また「研修員が研修を通して課題解決に必要な達成すべき目標をどのように設定するか」である。

そこで、昨年度に実施した研修員によるカントリーレポート、総括レポートおよび評価会での研修員からの研修受講に対する要望や意見をもとに昨年度のカリキュラムの編成内容の改善を行った。

3. 企画書作成に係るカリキュラム編成の主な要点

研修カリキュラムの選定や設定の際には、農村の貧困要因となっている原因のマイナス要因を取り去り、農村振興の推進の糸口となる因果関係を踏まえて設定した。各々のカリキュラム設定の因果関係および講義内容の要点は以下の通りである。

3.1 主要農産物「水稻」の品種改良

ベトナムの主食や主要農産物は米で、水稻生産量は年々増え続け、2012年における生産量は4,370万トン、輸出量は700万トンに達し、ベトナム貿易収支の唯一の貴重な黒字に寄与している。しかし、米産出国のタイやインド等との競争が厳しく、ベトナム米の単価は収穫後の管理水準が低いため低い状態である。

ベトナム米の単価を上げるためには、ベトナム地域に適合した品種改良や栽培技術・精米技術の向上の重要性を認識させる必要がある。

そこで、日本では農業を取り巻く環境、消費者の嗜好の変化に対応できるように、「多様なニーズに対応する米の品種改良や栽培技術」を研究開発している農業試験場での講義科目と圃場見学を設定した。

Fig-3.1は、白色度が高く食べても美味

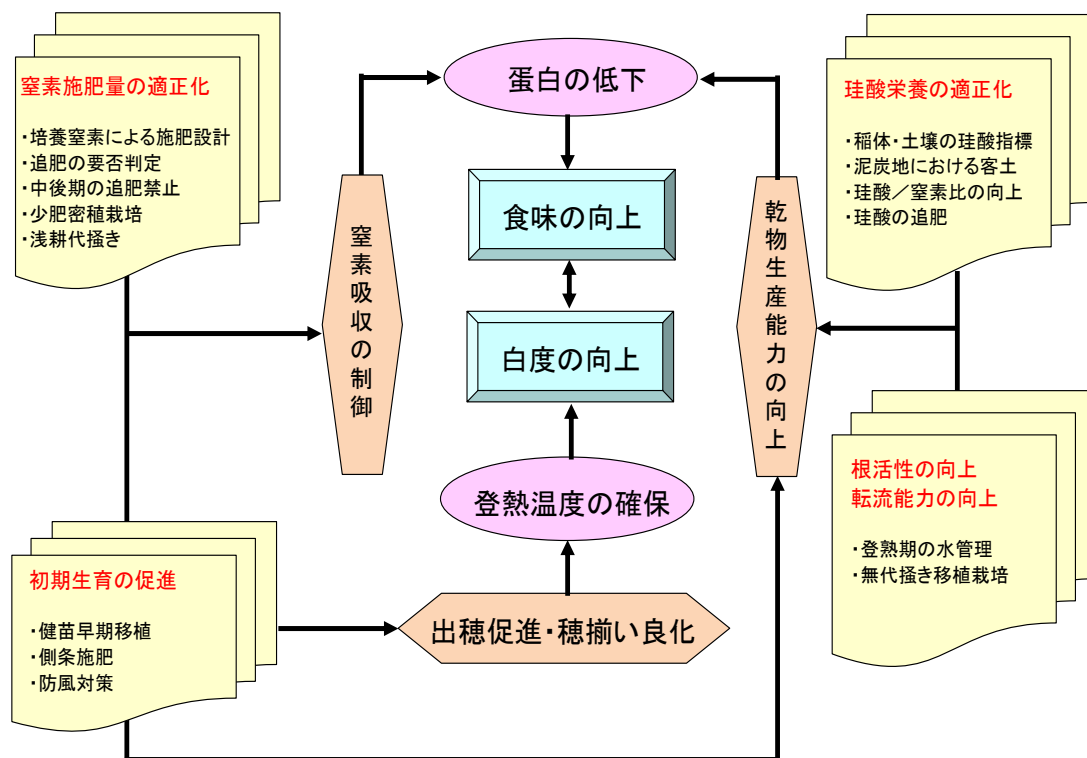


Fig-3.1 食味・白度の変動要因と安定向上技術のフロー

(出典：北海道立中央農業試験場生産研究部)

しい蛋白の低い米、整粒歩合の高い米を安定的に生産する基本として、過剰な窒素の吸収を抑え、適度な籾数をつけた登熟の良い稲を作るための高品質・安定生産技術のフローを示す。

3.2 農産物の高付加価値化と雇用の創出

ベトナムの2013年における農村人口割合は67.7%、農林水産業の2012年におけるGDP割合は19.7%で、その比率は年々低下してきてはいるが、このデータから分かるように、農村地域の資源賦存量に対して農村人口が未だ過剰であり、都市と農村との所得格差の拡大傾向に対する要因になっている。

農村の過剰人口による貧困問題を解消するため、農村部における地域資源である農産物の素材提供型の農業から価格支配力を高める高付加価値型農業への展開は、農産物の加工等を通じた農業の高付加価値化を図ることによって、農業者の所得向上や域内での雇用確保の創出により過剰人口を吸収することが可能である。

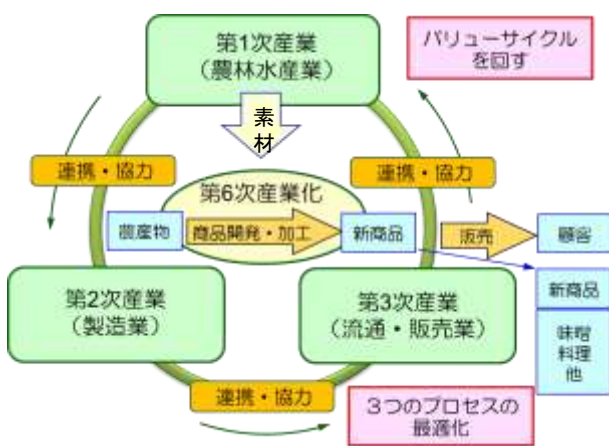


Fig-3.2 農林水産業と商工業者との連携・協力による6次産業化（出典：上天草市の国際的6次産業化マスタープラン・第一次アクションプランの概要）

そこで、ベトナムの主要農産物である米原料使用により加工する味噌醸造の製品は、農産物をそのまま売るよりも約5倍の付加価値が付くと言われている。その味噌醸造工場の施設見学を設定した。

Fig-3.2は、農林水産業の活力を高めるため2次産業と3次産業を融合・連携させることにより、農林水産業が有する資源は、食品産業を初めとする様々な産業と連携して利活用し、新たな付加価値を創出するとともに、農産漁村地域の雇用の確保と所得向上につながる6次産業化のイメージを示す。

3.3 公正取引による消費者に安定供給する中央卸売市場の見学

ベトナムの農産物は、農家段階での品種選定や施肥管理などの技術遅れに加え、収穫後の乾燥施設や、小規模集荷業者が介在するなどの多段階の流通経路となっていることから、流通システムが整備されていないために農産物の販売規模を拡大することが難しい現状にある。また、充実した卸売市場がないことから、農産物販売は常に小売市場の影響を受けることにより安定した販売ができないため、農産物の品質低下や価格低下を招き競争

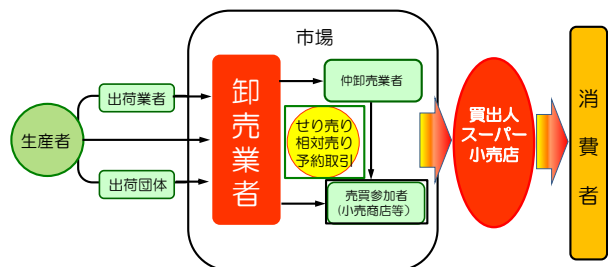


Fig-3.3 札幌市中央卸売市場における青果物の流通経路（出典：丸果札幌青果株式会社の会社案内）

力が弱くなっている。そのため、農産物の流通の改善が喫緊の課題となっている。

そこで、ベトナム農村で生産される生鮮食糧品の鮮度を落とすことなく、迅速に消費者へ公正な価格形成のもとで安定供給する流通システム構築の参考に資するために「札幌中央卸売市場」の見学を設定した。

Fig-3.3 は、札幌市中央卸売市場において仲卸業者や売買参加者等へ販売し、消費者に適正な価格で安定供給する流通経路を示す。

3.4 日本の低価格時代における農産物流通の革新方向

前述しているように、ベトナムにおける農産物は、農村の過剰人口と貧困の背景から低価格であり、また品種・技術の遅れと流通機構の未整備により低品質である。

流通の取引形態は、我が国の卸売市場に

おける公開競争取引ではなく、多くは相対取引で行われている。また、農産物は山積みなどによる取引で品質保持が余り考慮されていない状況にある。

農業所得を向上させるためには、ベトナムにおける流通機構を改善していくことが重要である。

一方、我が国の流通機構は大量生産・大量販売方式の卸売市場流通が主流を占めてきたが、近年の消費者ニーズの変化や量販店のマーケティング戦略の多様化、情報化の進展、規制緩和によるグローバル化の進展による農産物の低価格の移行により、農産物流通の効率化とコスト削減に向け、流通システムは大きく革新しなければならない状況に直面している。

このように流通システムは、風土や習慣、経済状況、消費者行動の変化を受けながら時代とともに変化を遂げている。

ベトナムにおける農産物流通システムが、未整備のために農産物の品質低下や

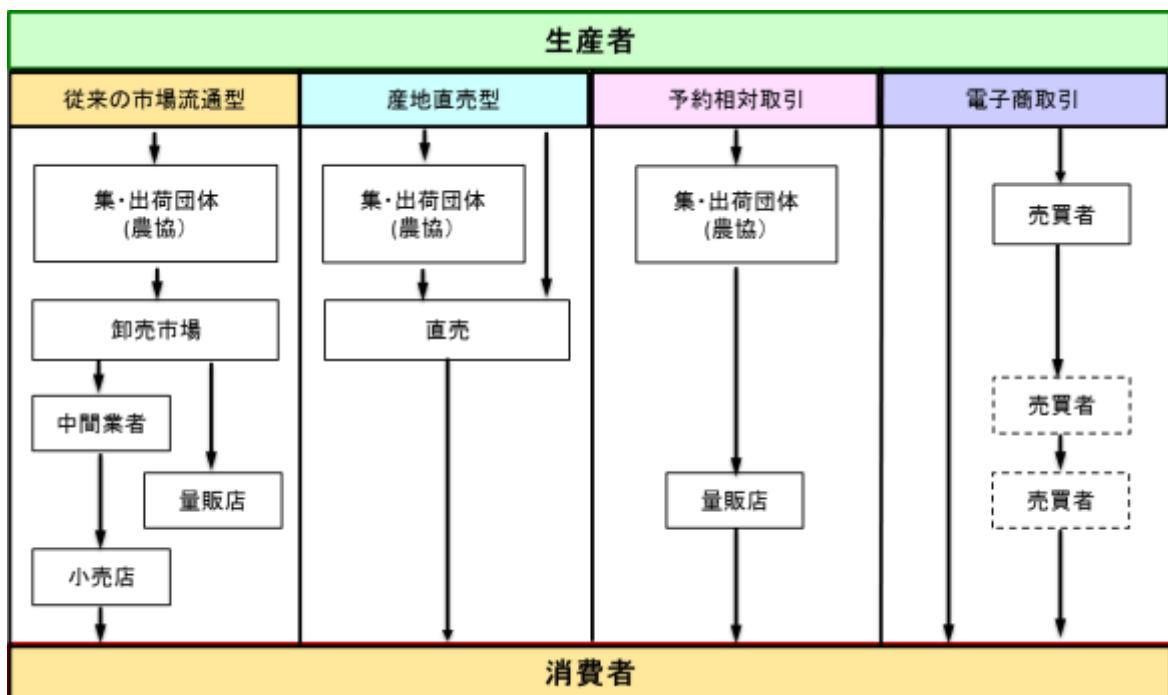


Fig-3.4 多様な農産物流通システム

(出典：開発金融研究所報 2,002 年 12 月 / 第 13 号)

価格低下を招いていることから、流通システムを同様に革新しなければならない状況にあることは明確である。

我が国の流通システムの革新方向を参考にしながら、ベトナム現地の社会制度やインフラ整備の実情に合わせて、時代の変遷とともに変容を遂げながら発展させることの重要性を認識してもらうために「時代の変遷に対応する農産物流通の革新方向」の講義科目を設定した。

Fig-3.4 は、我が国における4種類の農産物流通形態を示している。卸売市場流通は従来から主流を占めてきたが、近年の消費者ニーズの変化や量販店のマーケティング戦略の多様化、情報化などに伴い、流通形態が多様化している各流通形態においては、ITが農産物流の効率化に寄与している。

一つの流通形態だけを選択するのではなく、諸条件に応じて複数の流通形態を組み合わせることでロスを少なくすることができ、生産者の所得向上に寄与している。

3.5 行政による農業農村整備の取組み

アジア経済研究所 2012 年の「ベトナム農村発展」報告によれば、ベトナムでは新農村整備指導委員会が設立され、新農村整備事業は「新しい農村」を目指した総合的な農村基盤整備事業が進められている。その整備事業は、伝統的な農村社会の建設を目指し、圃場や水利、道路、送電線の整備といった社会基盤整備が、農業生産を向上させ、域内において小規模手工業・サービス産業部門の育成や、新規雇用の創出が進展し地域の安定した成長に寄与している。

しかし、一方で農業基盤の整備におい

て農村空間が消滅し、その伝統文化、生態系が破壊され、環境汚染が進行しているようである。

我が国の農業・農村を取り巻く情勢として、農家戸数の減少や高齢化の進行、農村のコミュニティ機能低下の懸念、グローバル化の進展に伴う安価な輸入農産物の増加による国産農産物価格の低迷や産地間競争の激化、更には新たな国際協定等の動きなど大きく変化している。

行政は、こうした情勢変化や課題に対する確に対応し、農業・農村が持続的に発展し、生命と健康の源である安全・安心な「食」を安定的に供給していけるように、農作物の収量や品質、農作業効率を向上させる区画整理や暗渠排水、農業水利施設、農道などの農業の生産を支えるための農業農村の基盤整備を推進している。

我が国の農村整備事業は土地改良法に定められた手続きに基づいて事業が実施されている。

その実施の仕組みは、土地改良事業に

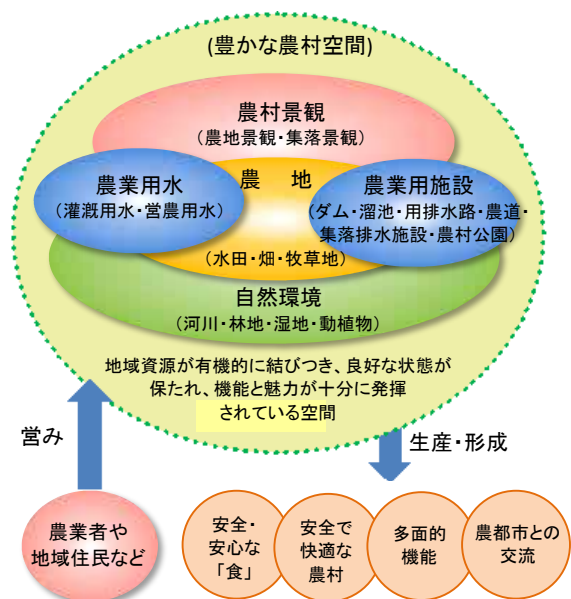


Fig-3.5 活気に満ちた魅力ある農村の創造 (出典：H24 北海道農業農村整備推進方針)

参加する資格を有する15人以上の組合員で構成された土地改良区の地域内の受益農家の2/3の同意を得た上で、国・都道府県に事業実施の申請を行い、国・都道府県は適否判断の上、自ら事業計画を作成して着工している。

農業生産の基盤の整備及び開発を図り、もつて農業の生産性の向上、農業総生産の増大、農業生産の選択的拡大及び農業構造の改善に資することを目的とした土地改良法や土地改良区、更に行政により行われる農村整備事業の重要性を認識させるために、「行政による農業農村整備の取組みや土地改良区の組織」の講義科目を設定した。

Fig-3.5は、農業・農村を持続的に発展させ、次世代に引き継いでいくためには、農村地域の持つ「農地」「農業用水」「農業用施設」「自然環境」「農村景観」の5つの地域資源が有機的に結び付き、良好な状態に保たれるように保全・整備することにより、多面的機能が十分に発揮される豊かな活力に満ちた魅力ある農村空間の創造のイメージを示す。

3.6 農地利用集積等の経営改善

ベトナムの総農家戸数は約1千万戸と推計され、その半部以上が北部・紅河デルタと南部・メコン・デルタに集中しており、山岳地帯の北西部と南部高原には農家戸数が少ない状況にある。

1戸当たりの農地面積は、全国平均で0.736haとなっているが、南部高原、南部工業地帯及びメコン・デルタ地帯の3つの地域が1.2~1.8haの水準にあるのに比べて、その他の地域は0.5ha未満で、特に人口密度が高い北部・紅河デルタの地域の平均は0.25ha程度と小規模な零細

農業経営である。

耕作面積が小さいことから、労働効率が低く、生産性の低下や過剰な人的労働資源に依存する後進的技術水準から脱却できない。そのため、農地の利用集約による経営規模の拡大は、圃場の大区画化での大型機械の導入により省力化・低コスト生産を実現することが可能にする。

我が国では、農業者の高齢化や農業離れが進み耕作放棄地が増加している。そ

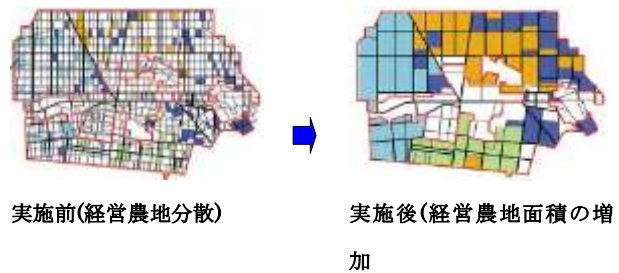


Fig-3.6a 農地の利用集積向上による大規模経営の実現

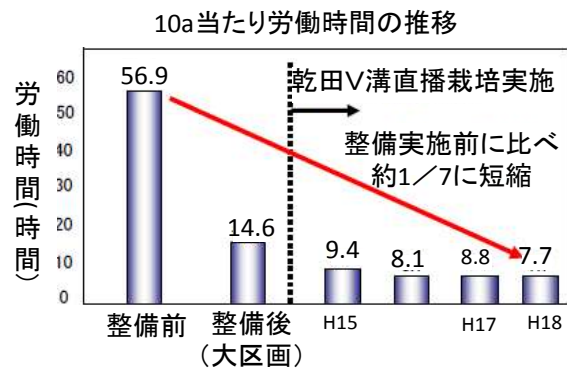


Fig-3.6b 事業実施前後の経営構造の変化

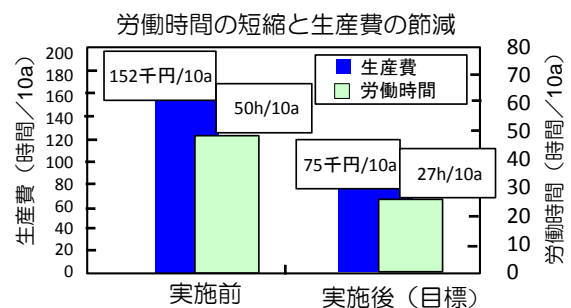


Fig-3.6c 水田の大区画による作業の効率化・経費の節減 (出典:「圃場整備の効果と農家の負担」農林水産省・農村振興局農地整備課)

ここで、荒廃した耕作放棄地の再生や農地を担い手へ斡旋し、地域農業の効率的な生産と経営安定化を推進する事業として、(公財)道央農業振興公社が実施している「農地利用集積円滑化事業」の講義科目を設定した。

Fig-3.6a は、農地利用集積の推進により、耕作放棄地の解消や大規模経営の実現による生産性向上を示している。

Fig-3.6b は、区画整理により圃場の80%が大区画圃場(50a 以上)に整備され、更にコスト縮減を図るため一部圃場で乾田V溝直播栽培により労働時間が短縮することを示している。

Fig-3.6c は、大型機械の導入などの効率的な作業により省力・低コスト生産の実現を示している。

3.7 農業改良普及センターの仕事

ベトナムには、農業者に対し農業栽培技術と技術普及の際の問題点の把握や、改善技術の確立と技術移転・普及を行う農業普及センターが存在するが、栽培技術の向上や新しい農業技術を普及させるための組織・制度・技術が未だ脆弱の状況にある。

我が国においては、農業普及事業として、農業改良助長法に基づき、農業者が農業経営や農家生活に関する有益・実用的な知識を取得・活用できるように、都道府県が国との協同事業として国家資格を有する普及指導員を配置している。

そして、普及指導員は試験研究機関と連携しながら、直接農業者に接して巡回指導や相談によって技術や知識の普及を行う仕組みが整備されている。

そこで、農業生産の向上や農作物の品質向上のための技術支援や農業経営支援



Fig-3.7 農業普及員の仕事 (出典：農林水産省経営局普及・女性課発行)

の仕組みを育成できるように、ベトナムの脆弱な農業普及センターの改善に資するため、「農業改良普及センターの仕事」講義科目と施設見学を設定した。

Fig-3.7 は、農業普及員が農業経営と農村生活の向上に取り組む農業者の様々な活動を支えるために、試験研究機関と連携しながら、巡回指導や相談等により直接農業者に接して技術・知識の普及指導を行う実施フローを示す。

3.8 灌漑施設と用水管理

1975年のベトナム戦争終結後、米の増産を目的に多数の灌漑ダムや堰による灌漑施設が建設されたが、現在は堤体が破壊する恐れがあるほどの老朽化が著しい



Fig-3.8a 計画貯水水位まで貯留できないための放流（出典：ベトナム研修員によるカントリーレポート）



Fig-3.8b 洪水による決壊堤防の補修（出典：ベトナム研修員によるカントリーレポート）



Fig-3.8c 洪水（出典：ベトナム研修員によるカントリーレポート）



Fig-3.8d 気候変動による干ばつ（出典：ベトナム研修員によるカントリーレポート）

ため、計画貯水水位まで貯溜することができない危険な状況にある。

また、最近の気候変動現象の進行によりインドシナ半島の広い範囲で豪雨や多雨が発生し、上流部のダムでは早々に満水となるが、余水吐の能力や放水路の能力が不十分なため洪水後に法面浸食が発生し、下流部の人家や道路の安全を脅かしている。(Fig-3.8a、3.8b および 3.8c)

一方で、メコン川上流の中国によるダム放水制限が原因との報道もあるが、中

国南部一帯が100年に1度という大干ばつに見舞われ、メコン川流域では異常渇水が発生している。(Fig-3.8d)

更に、地球温暖化に伴う海面上昇により沿岸部では塩水遡上の影響を受けて淡水不足に見舞われている。また、灌漑施設の老朽化による給水能力の著しい低下と相まって、灌漑施設の老朽化が農業生産性に悪影響を及ぼしている。

灌漑施設の用水管理における灌漑管理公社と農業協同組合との連携・調整不足や、正確な流量データに基づいたきめ細かい配水管理が行われていないため、農家のニーズに合った配水が行われていないのが現状である。

そこで、我が国では土地改良区における土地改良事業として、稲作に必要な農業用水を確保するために灌漑施設の整備を行っている。

その事業実施の仕組みは、受益者負担の原則により地域の耕作者の2/3以上の同意により整備できるが、様々な形の公的支援による建設事業の実施と補助金等を通じた財政支援がある。また、施設の維持管理は独自の賦課金システムを組み合わせ合わせた施設管理システムによって行わ

れている実情を参考に資するために「我が国における灌漑施設と用水管理システム」の講義科目と施設見学を設定した。

3.9 食品安全マネジメントシステム

経済社会のグローバル化に伴い、農産物や食料品が国境を越えて大規模かつ活発に移動している。それに伴い、輸入農産物や食料品から有害な物質や残留基準を超える農薬が検出されるなど、食の安全・安心を脅かす問題が生じている。

ベトナムから我が国への野菜・果実や

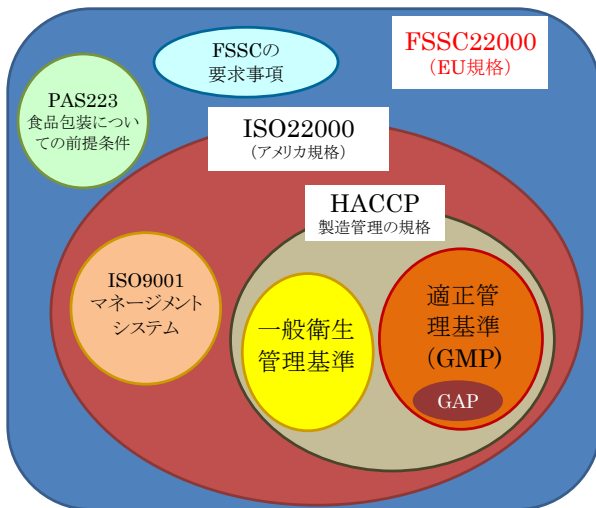


Fig-3.9a 食品安全に特化した規格 (出典：研修教材／酪農学園大学教育センター特任教授・鈴木忠敏)



Fig-3.9b 農場から食卓までのトレーサビリティ (出典：研修教材／酪農学園大学教育センター)

冷凍えび等の輸入食品にかかる残留農薬やカビ・微生物、添加物などの違反事例数がアジアの中で中国に次いで多いと報告されている。

この違反事例から考察して、ベトナムにおける食品の安全・衛生面に関しては政策制度の未整備や管理者の能力不足等の問題から、適切な管理がなされているとは言い難い状況にある。

消費者に対して農水産物の信頼度を高め、販路を拡大するためには、農産物の生産段階から消費段階に至る安全と品質確保に取り組むことが重要である。

その取組みとして、①リスク評価・リスク管理・リスクコミュニケーションから構成されるリスクマネジメントの HACCP 手法や、②生産された農産物の安全性や品質を確保するために農産物生産活動の各工程の正確な実施・記録・点検・評価に要る持続的な改善活動の GAP 手法、③消費者・顧客に安心感を与える手法の MS 認証(ISO22000)と製品認証(JAS 制度)の仕組み、④食品事故等の問題発生時に食品の移動ルートを書類等で特定し、遡及・追跡して、原因究明や商品回収、再発防止としてのトレーサビリティや製品検査にかかる食品安全マネジメントシステムについての認識を深めさせるため、「食品安全マネジメントシステム」の講義科目を設定した。

Fig-3.9a は、食品安全に特化した規格の体系図を示す。Fig-3.9b は、農場から食卓までの流通段階における食品の安全を確保するためのトレーサビリティを示す。

3.10 ホクレンの業務と役割

ベトナム政府は、農業協同組合組織を

強化するため、農業合作社から新農業協同組合への転換、新農業協同組合の設立促進を積極的に進め、2004年11月現在では全国で9,096の農協組織(新設農協:2,137、転換農協:6,932)が存在している。

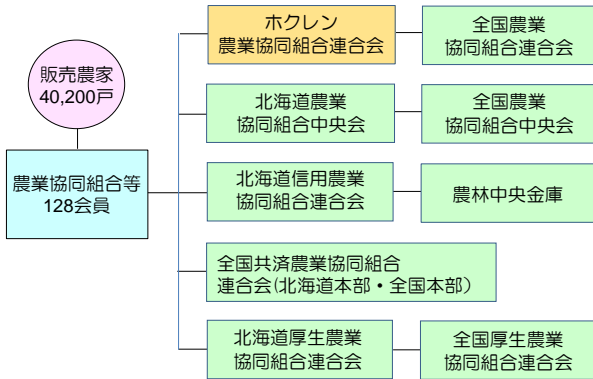


Fig-3.10a JAグループの組織

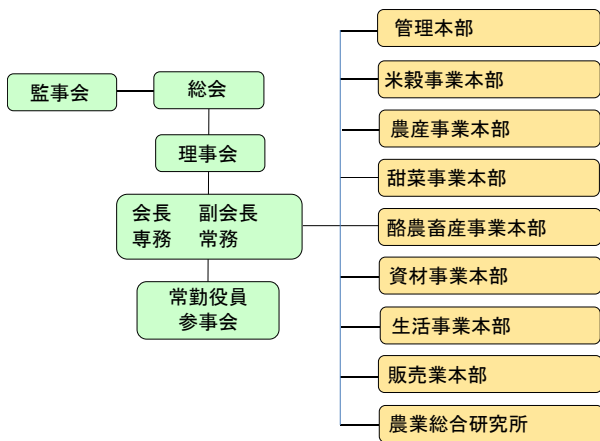


Fig-3.10b ホクレンの組織



Fig-3.10c ホクレングループの活動内容

しかし、多くの農業協同組合は、農協役員職員の経験・能力不足から、事業機能および経営手法は旧合作社を踏襲し、市場動向を踏まえた農産物加工、生産資材の共同購入、農産物共同販売、金融事業等への取組みが進んでいないため、農民の多くが生産および流通上の問題を抱えている。

そこで、北海道の農業生産の支援や消費者への食の安定供給を担っているホクレン組織が効率的かつ効果的に実施している事業内容および役割の知見を習得させベトナム農協の改善に資する。

JAは、Fig-3.10aに示すように販売・購買・信用・共済などの事業を総合的かつ効率的に展開するためにJAとJA連合会による事業組織が形づくられている。

Fig-3.10bに示すように、ホクレンは生産者と消費者をつなぎ、更に北海道の農村と国内外の街をつなぐために、ホクレンの各事業本部は密接に連携しながら活動している。

Fig-3.10cに示すように、ホクレンは「生み出す」「支える」「届ける」「広げる」「育む」の5つのアクションをグループで連携しながら展開し、安全・安心な北海道の農産物を提供している。

2.11 農村金融の課題

ベトナムにおける農村金融の現状として、農民自身の資産貯蓄が低いこと、金融機関からの融資に頼らざるを得ない状況にある。

しかし、フォーマル金融は形成過程であり、資金ポジションが悪いこと、絶対的な資金不足となり、農業・農村の金融需要に十分に答えられない状況から農家は資金不足に陥っている。フォーマル金

融の信頼不足とアクセス不足のため、農家はインフォーマル金融の依存が高く、世帯単位の借入シェアは7割に達している。

また、ベトナム農村では、農協が機能していないため、農家は自ら資材購入しなければならない状況にある。

そこで、農業資材販売会社は農家に資材融資という形で融資するインフォーマル金融の形態も存在している。

我が国の農業金融は農協金融と言われるように、農協は施設や長期的な運転資金のための政府の利子補給による農業近代化資金や、農家の短期的な運転資金を中心とした業務の他に、日本政策金融公庫の窓口となって長期低利の設備資金の業務を行い、農協が農業金融業務の殆どの役割を担っている。

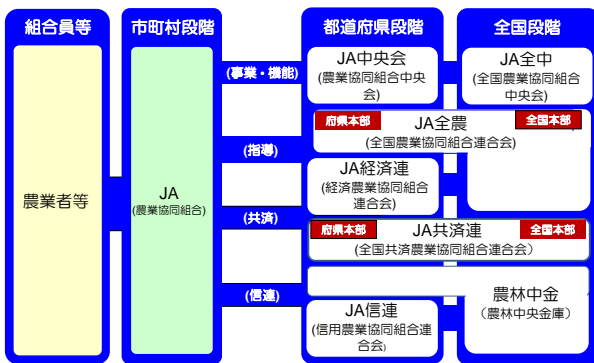


Fig-3.11b JAバンクの主な系統組織の仕組み (出典：JAバンクの紹介)

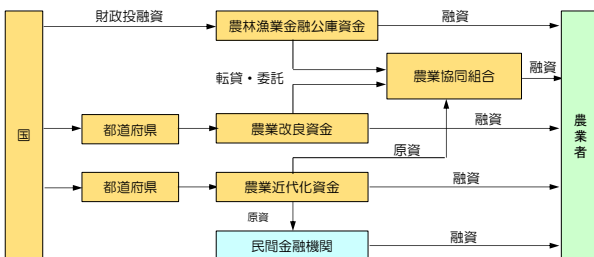


Fig-3.11a 我が国の農業融資フロー (出典：ISFJ2008 政策フォーラム発表論文「新しい農業金融制度の構築」)

Fig-3.11a で示しているように、農業金融は国と農協によって行われ、国からの資金は農協に転貸・委託され、農業者に渡るようになっている。

Fig-3.11b で示しているように、JAバンクは全国に民間最大級の店舗網を展開し、JA・JA信連・農林中央金庫で構成され、実質的にひとつの金融機関として機能している。

3.12 農村ホームステイによる農業体験

経済のグローバル化の進展によって、日本は様々な枠組みの中に組み込まれ、国際社会から孤立しては生きて行けない国際化の時代を迎えている。

国際化の進展は、政治、経済、文化、環境など様々な分野で地球規模の活動が展開され、また日常生活においても様々な国の人々や異文化と接する機会が増えている。それに従い、相互理解の不足か



Fig-3.12 恵庭市民・農業者との国際交流と意見交換会の状況 (上および下：ベトナム研修員たち、中：ホームステイ農家)

ら色々な摩擦が引き起される可能性がある。

対外的な異文化との交流は、多少なりとも様々な摩擦が起こる。しかし、その摩擦は良い面での捉え方として、日本の安定した経済社会に漂う閉塞感を打破するエネルギーとなり、日本の経済社会にイノベーションを引き起こすカンフル剤にもなる。

国際交流を続けていく過程で、行政から個人と個人への交流のつながりが進展する中で、国際親善が深まり、相互理解が増進するにつれて、人々の豊かな生活の実現や地域の活性化、地域産業の創出、ひいては国際平和の貢献に繋がる可能性を秘めている。

ベトナム研修員が農村振興コースを受講する一環として、恵庭農村地域での座

学や施設見学の研修受講の機会を踏まえ、ベトナム研修員と恵庭市民や農家のひとたちとの討論や農村ホームステイを通じて、異文化に対する体験型交流を進める。

その結果、双方の心と心の触れ合いにより、双方の文化や歴史、価値を理解し、友好親善と相互理解を増進させることができる。昨年度の研修員からは好評で、農村ホームステイの滞在日数を増やして欲しいとの強い要望があった。

4. 農村貧困の因果関係を踏えた研修カリキュラムの構成

研修カリキュラムの編成に当たっては、HIC 会報誌増刊号(参照 31 頁)で記載している「ベトナム農村の貧困原因が複雑に絡み合った因果関係や相互関係の特定要因」をもとに平成 25 年度の研修実績

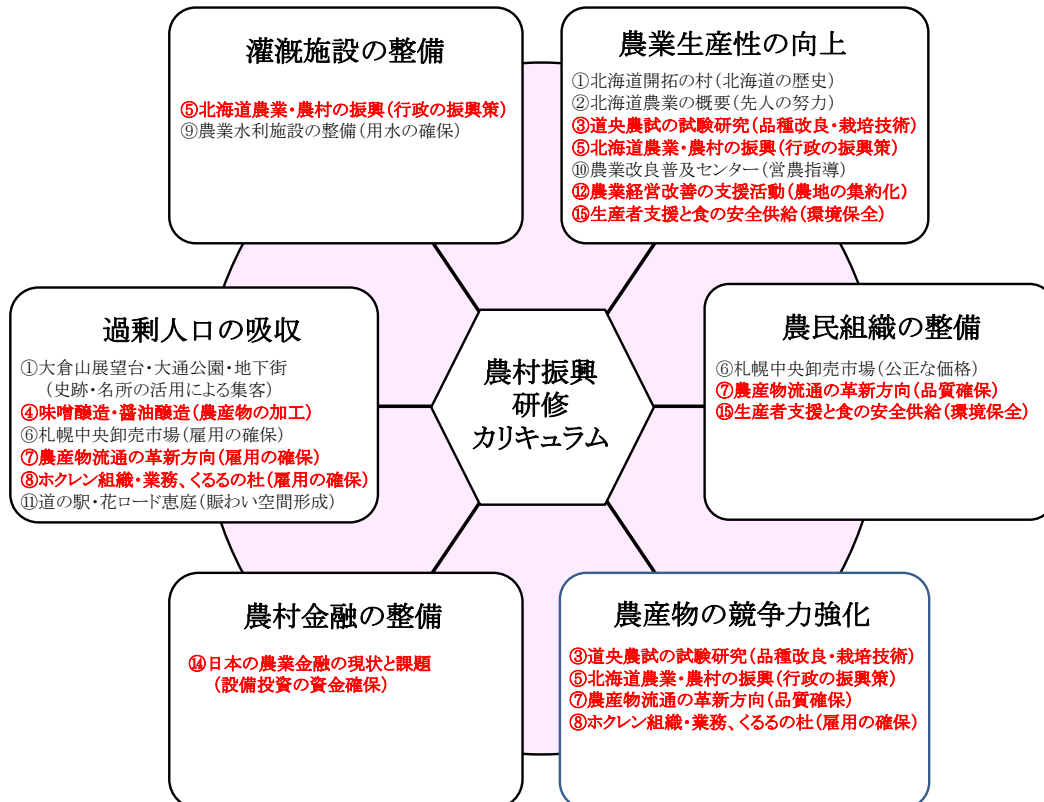


Fig-4 ベトナム農村振興にかかるカリキュラム構成

を踏まえ、カリキュラム構成および講義内容の一部を改編(太字)した。その研修カリキュラムの構成を Fig-4 に示す。

5. 研修業務の公告から履行完了までの工程

青年研修業務が公告されたのが4月18日、企画書の提出期限が5月23日で、企画書作成に充当できる日数は35日間で、審査決定通知を受けた日が応募締切日から13日後の6月6日であった。

また、JICA 担当者との初回打合せ協議は、審査決定通知を受けた7日後の6月13日に早々に行ったことにより、研修業務実施の準備日程としては余裕のある114日間で行うことができた。その研修業務の公告日から契約履行まで作業工程を図-5 に示す。

6. シラバス作成における PDCA サイクルの活用

シラバスは、講師が講義する際の学習目標(到達目標)を具体的なものにし、必

要な教材を執筆・制作するための設計書・仕様書となるものである。研修員はシラバスを読むことで講義内容を知り講義に参加していくイメージを作ることによって、講義の理解が容易になる。

平成26年度の研修プログラムの構築に当たっては、昨年度に実施した研修内容に対する研修員からの評価や要望・意見を活かすことにより、シラバスの品質確保・向上および継続的な業務改善活動に

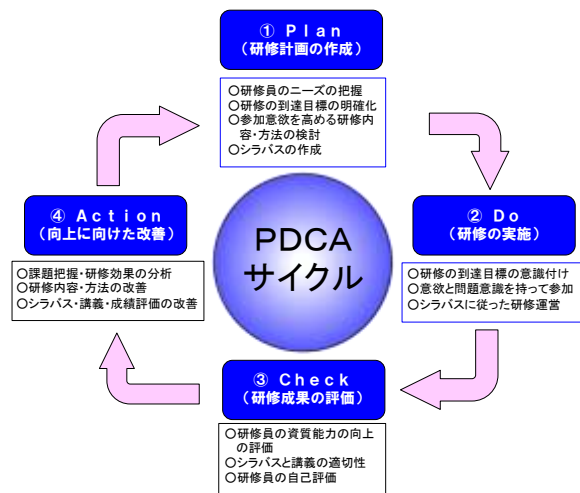


Fig-6 シラバス作成における PDCA サイクル

業務項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
研修業務の公告	4/18	5/23						
企画書提出期限	32日間							
審査決定通知		審査中	6/6					
カリキュラム再検討			13日間					
シラバス作成								
講師派遣依頼								
教材原稿待ち								
講義テキストのベトナム語翻への訳見積・発注					9/2	9/8		
講義テキスト印刷見積・発注						9/10	9/20	
研修期間						9/23	10/10	
業務完了報告書および経費精算報告書の作成・提出							10/10	11/21
							42日間	

Fig-5 研修業務の公告日から研修履行および業務完了報告書提出までの工程

資するために、Fig-6 に示すマネジメント手法のPDCA サイクルに基づいてシラバスを作成した。

PDCA サイクルとは、事業活動における生産管理や品質管理などの管理業務を円滑に進める手法の1つである。

1950 年代に品質管理の父といわれる Dr. William Edwards Deming が、生産プロセスの中で改良や改善を必要とする部分を特定・変更できるようにプロセスを測定・分析し、それを継続的に行うために改善プロセスが連続的なフィードバックループとなるように提案したものであ

る。

7. 研修プログラムの日程

研修期間は出入国を含めて 18 日間で、正味にすると 8 日間に満たない非常に短い研修期間内に多くのカリキュラムを組み込んだタイトなスケジュールとなった。カリキュラム編成は、3 項(主な要点)で記述しているように、農村の貧困要因を取り去り、農村を振興させる上で有益となる内容の講義および施設見学を設定した研修プログラムの日程表を Table-3 および Table-4 に示す。

Table-3 研修プログラム日程表 (その 1)

区分	月日	時刻	形態	研修内容	研修場所
来日プログラム	9/23(火)			来日	JICA札幌
	9/24(水)	9:00 ~ 12:00	講義	来日手続き等(ブリーフィング)/開講式	JICA札幌
		13:00 ~ 17:30	講義	プログラムオリエンテーション	
	9/25(木)	9:00 ~ 17:30	講義	ジェネラルオリエンテーション(日本の経済)	JICA札幌
				ジェネラルオリエンテーション(日本の教育)	
				ジェネラルオリエンテーション(日本の政治経済)	
	9/26(金)	9:00 ~ 12:00	発表	カンントリーレポート発表会(2職場代表研修員)	JICA札幌
		13:00 ~ 17:00		カンントリーレポート発表会(2職場代表研修員)	
	9・27(土)	10:00 ~ 12:00	見学	北海道開拓の村	札幌市
		13:50 ~ 15:30	見学	大倉山展望台	
16:00 ~ 17:30		見学	大通公園・地下街歩行空間		
18:30 ~ 20:30		歓迎会	アサヒビール園白石 ハマナス館		
9/28(日)			自主研修		
9/29(月)	9:00 ~ 11:30	講義	北海道農業の概要	JICA札幌	
	13:00 ~ 16:30	講義・見学	多様なニーズに対応する米品種と栽培技術	岩見沢市	
9/30(火)	9:00 ~ 11:30	講義・見学	農産物加工の味噌・醤油醸造	札幌市	
	13:00 ~ 13:20	表敬	北海道知事/農水部長	北海道庁	
	13:30 ~ 17:00	講義	北海道農村振興対策について		
10/1(水)	5:30 ~ 7:30	講義・見学	札幌市中央卸売市場	札幌市	
	9:00 ~ 12:00	講義	低価格時代における農産物流通の革新方向	JICA札幌	
	13:30 ~ 17:00	講義・見学	ホクレン組織・生産者支援と食の安定提供、「くるるの杜」の見学	北広島市	
10/2(木)	9:00 ~ 11:00	講義	恵庭土地改良区における農業水利施設の現状と今後の課題	恵庭市	
	11:00 ~ 12:00	見学	恵庭地区における農業水利施設の見学		
	13:00 ~ 16:00	講義	石狩農業改良普及センターの仕事と魅力		
	15:20 ~ 16:20	見学	石狩農業改良普及センター支援圃場(中央園芸)		
	16:30 ~ 17:30	見学	道の駅 花ロードえにわ		
10/3(金)	9:00 ~ 11:00	講義	農地利用集積などの農業経営改善に向けた支援活動	恵庭市	
	11:00 ~ 12:00	討論会	国際交流に係る恵庭市民と農家との意見交換会		
	13:00 ~ 翌日	ホームステイ	農業体験		
10/4(土)	9:00 ~ 12:00	見学・移動	JA道央農協→恵庭管内農業施設見学→JA道央農協	恵庭市	
	13:00 ~ 15:00	討論会	国際交流に係る恵庭市民と農家との意見交換会		
	16:00 ~ 17:00	自習	自主研修		JICA札幌

Table-4 研修プログラム日程表 (その2)

区分	月日	時刻	形態	研修内容	研修場所
	10/5(日)			自主研修	
	10/6(月)	9:00 ~ 12:00	講義	日本における農業金融の現状と課題について	JICA札幌
13:00 ~ 15:00		講義	信頼確保のための食品安全マネジメントシステム		
15:00 ~ 17:00		自習	総括レポートの作成		
	10/7(火)		自習	総括レポートの作成／発表準備	JICA札幌
	10/8(水)	9:00 ~ 10:30	講義	補講(質問、疑問に答えて)及び総括 農村振興・貧困の特定要因についての説明	JICA札幌
10:30 ~ 12:00		発表	総括レポート等の発表会		
13:00 ~ 15:30		発表	総括レポート等の発表会		
帰国準備等	10/9(木)	10:00 ~ 11:00		評価会	JICA札幌
		11:30 ~ 12:00		閉講式	
		12:00 ~ 13:30		送別会	
		13:30 ~		帰国準備	
	10/10(金)			帰国	

8. 研修受講状況

研修員の講義および施設見学の状況写を以下に示す。



Fig-8.1 北海道開拓の村・管理棟での集合写真
2014.9.27



Fig-8.3 アサヒビル園「はまなす館」での歓迎会
2014.9.27



Fig-8.2 大倉山・札幌ウインタースポーツミュージアムのジャンプに興じる研修員
2014.9.27



Fig-8.4 北海道開拓の村での畳作りを見学する研修員
2014.9.27



Fig-8.5 札幌地下街を散策する研修員
2014.9.27



Fig8.8 福山醸造での醤油醸造の歴史展示室を
見学する研修員
2014.9.30



Fig-8.6 アサヒビル園「はまなす館」での歓迎会の席で合唱する研修員
2014.9.27



Fig-8.9 研修員の表敬訪問で挨拶する北海道
庁の竹林農政部長
2014.9.30



Fig-8.7 中央農業試験場岩見沢試験地で中村
研究主幹から「多様なニーズに対応する米品
種と栽培技術」の講義を受ける研修員
2014.9.29



Fig-8.10 中央農業試験場岩見沢試験地の稲作
の圃場を見学する研修員
2014.9.29



Fig8.11 福山醸造本社玄関前での集合記念写真
2014.9.30



Fig-8.14 「低価格時代における農産物流通の革新方向」についての講義した拓殖大学北海道短期大学の村上良一准教授に感謝を込めて記念品を手渡す研修団の団長
2014.10.1



Fig-8.12 道庁農政部の榎および平田主査から「北海道農業農村整備事業の概要」の講義を受ける研修員
2014.9.30



Fig-8.15 恵庭土地改良区の宮田寛理事長から歓迎の挨拶を受ける研修員
2014.10.2



Fig-8.13 札幌市中央卸売市場での水産物の「せり」状況を見学する研修員
2014.10.1



Fig-8.16 札幌市中央卸売市場で青果物の「せり」状況を見学する研修員
2014.10.1



Fig-8.17 ホクレン「くるるの杜」のビニールハウスでのイチゴ栽培を見学する研修員
2014.10.1



Fig-20 恵庭市農家に水稻栽培を道央農業協同組合の濱崎裕史営農センター長から説明を受ける研修員
2014.10.3



Fig-8.18 恵庭土地改良区の揚水機場を見学する研修員
2014.10.2



Fig-8.21 HIC 向井博二事務局長から「農業金融の現状と課題」の講義を受ける研修員
2014.10.6



Fig-8.19 石狩農業改良普及センター長から挨拶を受ける研修員と「農業改良普及センターの仕事」を講義する里見次長
2014.10.2



Fig-22 道央農業振興公社の松尾道義理事長から「農地利用集積等の農業経営改善の支援活動」の講義を受ける研修員
2014.10.3



Fig-23 米の共選施設を見学する研修員
2014.10.3



Fig-24 「食品安全マネジメントシステム」について講義する酪農学園大学の鈴木忠敏特任教授
2014.10.6

9. 研修コースに対する所見

9.1 研修期間・配列・密度

研修期間は出入国を含めて18日間と設定されているが、実際には正味8日間弱と非常に短い期間であった。その期間内に農村振興という高邁な課題に対して、日本農業に係る知識や技術の基礎的理解を付与することは至難の業である。

しかし、限られた短い期間であるが、研修員に幅広い知識を吸収してもらうために、世界の先端を行く日本の農業技術、高品質で安定した優良な栽培技術、行政による振興支援施策等をカリキュラムに組み込んだ。加えて、「百聞は一見に如かず」というように、直接肌で実感できる現場体験としての見学をできる限り取り込んだ。

従って、研修の日程や密度は研修員にとって、タイトでハードなスケジュールであったが、研修員全員が最後まで学習意欲が高く、質疑も多く、真剣に精力的に知識を吸収していた。そのことから判断し、有意義な研修であったと思料する。

9.2 テキスト・機材・施設

講義のテキストや見学先の資料は、講

師から原稿を事前に取り寄せ、ベトナム語に翻訳し印刷製本した。

しかし、限られた予算の関係からテキストの作成に当たり、テキストデータをかなりの部分を削除せざるを得なく、研修員に対して十分な資料を提供できなかったのは心残りである。

教材テキストは、プログラム・オリエンテーションの開始前に配布し、これから始まる研修の一連のスケジュール、研修の概要、研修上の達成目標について説明を行った。更に、個々の研修カリキュラムの内容を事前に目を通しておくように要望した。

そのテキストは、事前カリキュラムの概要を容易に把握できるように配慮したものであり、これから研修を受ける際のプログラム内容の各カリキュラムについての羅針盤とも言えるシラバスを挿入した。

研修に使用する視聴覚機材や施設はJICA 北海道や受入先機関で準備対応して頂いた。その機材などによる研修遂行に支障となるようなことはなかった。

10. 研修員の対象者

研修員の対象者は、昨年度の研修と同様に「農村振興に携わる行政官・農民団体職員」で、「目標は将来のリーダーとして農村振興の課題解決を担う青年層の知識と意識の向上」としている。

今回のベトナム農村振興コースに参加した16名の研修員の殆どは、共産党の青年連合組織である「Youth Union」のメンバーで30歳から37歳であった。

研修員の所在地は、北部のハノイ市が6名と多く、その近隣地域が5名、南部のホーチミン市近隣地域が5名であった。

Table-3に参加した研修員の名簿一覧表を示す。

農村振興と言うテーマであれば、農民の中から、特に意欲のある優秀な農民や農民の息子などを研修員に加えることができれば、より効果的な研修成果が期待できるものと思料する。

その観点から、恵庭土地改良区での農村ホームステイの農民ホストからも農民息子との交流に対する要望があった。

Fig-10.1に研修に参加したベトナム研修員、JICA 松島正明所長、JIC 小田切清治担当者、研修監理員およびHICの業務従事者たちの集合写真を示す。

Table-3 参加研修員名簿一覧

No	Name	Age	Office	Location City
1	Mr. NGUYEN Tuan Phong	31	Hung Yen Provincial Department of Agricultural and Rural Development	Hung Yen City
2	Mr. TRAN Hoang Giang	34	Ho Chi Minh Communist Youth Union of Long An Province	Tan An City,
3	Mr. NGUYEN Truong Son	35	Ho Chi Minh Communist Youth Union of the Association of Central Corporations	Ho Chi Minh
4	Mr. NGUYEN Tuan Anh	32	Ho Chi Minh Communist Youth Union of An Giang Province	Long Xuyen City
5	Ms. NGUYEN Thi Mai Cuc	33	National Committee on Youth of Vietnam	Ha Noi
6	Mr. DUONG Quang Huy	35	Committee rural youth, Ho Chi Minh Communist Youth Union	Ha Noi
7	Ms. DINH Thi Viet Huynh	37	Department of Science and Technology, People's Committee of An Giang Province	Long Xuyen City
8	Ms. NGUYEN Thi Mai	36	Youth Organizational Department, Ho Chi Minh Communist Youth Union of Ha Giang Province	Ha Giang City
9	Ms. LO Hai Dinh	35	Cultivation-forestry Division, Agricultural Extension Center, Department of Agriculture and Rural Development, People's Committee of Dien Bien Province	Dien Bien Phu City
10	Mr. DANG Thanh Phuc	35	Ho Chi Minh Communist Youth Union of Ham Thuan Bac District, Binh Thuan Province	Binh Thuan Province
11	Mr. DO Tien Dung	35	Ho Chi Minh Communist Youth Union, Ministry of Agriculture and Rural Development, Vietnam National Union of Agriculture and Rural Development Workers	Ha Noi
12	Mr. VU Quy Phat	30	Work Construction Management section, Nghe An Provincial Department of Agriculture and Rural Development	Vinh City,
13	Mr. LE Thanh Van	35	International Cooperation Department, Ministry of Agriculture and Rural Development	Ha Noi
14	Mr. NGUYEN Huu Tuan	36	Ninh Thuan Provincial Youth Union	Phan Rang-Thap Cham City
15	Mr. HO Xuan Hieu	33	The Volunteer youth on Economic Development Corporation, Ho Chi Minh Communist Youth Union of Ha Tinh Province	Ha Tinh City
16	Mr. NGUYEN Hong Quang	35	Inspection, Ministry of Agriculture and Rural Development	Ha Noi



Fig-10.1 閉講式の集合写真 2014.10.09

11. 研修参加の意欲・受講態度

研修員の参加意欲は、カントリーレポートや総括レポートの発表においても判断できる。カントリーレポートの発表内容は、ベトナム農村の置かれている位置付けや問題点を的確に要点を捉えていた。

総括レポートの発表においても、北海道農業の発展の神髄を良く理解し把握した上で、ベトナム農業・農村の改善改革すべき事項を的確に捉えていた。

そのことから、研修員の参加意欲や受講態度は真剣で真面目に聴講し、講義や見学先では熱心にメモを取り、不明点や疑問点については積極的に質問していた。

そのことから、研修員たちは良好な受講態度であったと判断している。

なお、カントリーレポートの発表方法において、研修員一人ひとりが発表するには時間が不足するため、事前に4グループ分けした代表者が発表するよう通知していた。

レポートの作成に当たり、グループ発表の代表者がメインとなって作成したのは自らであるが、発表者以外のグループメンバーがどのように関わっていたかは不明である。

カントリーレポートおよび総括レポートを発表するグループ代表の発表状況を Fig-12.1 および Fig-12.2 の写真に示す。



Fig-12.1 カントリーレポート「合作社の設立と展開」発表の第4グループ代表者：
Mr. DUONG Quang Huy 2014.09.26



Fig-12.2 総括レポート「合作社の設立と展開」を発表する第二グループの発表者：
Ms. NGUYEN Thi Mai

12. 研修の成果

研修最終日の総括レポートの発表会で、研修員が本研修で学んだ講義や訪問先で吸収した知識や体験をパワーポイントにまとめて発表した。研修員が修得した優良な日本農業の実情の要点をまとめると以下の通りである。

- (1) 日本の農業振興に対する行政の役割は明確で、地域特性に適合した施策を行っている。
- (2) 行政の指導のもとに、水産農産物の流通販売システムとしての卸売市場や小売市場が良く整備されている。
- (3) 日本の農業は、機械化が進んでいる。また、土壌改良、品種改良およびハウス栽培など諸々の技術が進んでいる。
- (4) 作業効率や品質が高く、低コストの大量生産を行っている。
- (5) 農家はJAの存在により、農産物の生産から消費までの支援、更に融資・保険制度などの支援を受けられる良いJA組織が整備されている。
- (6) 農業生産に欠かせない用水確保の農業水利施設が整備されている。その施設維持のための制度として農家負担制度がある。ベトナムにとって、見習うべき制度である。
- (7) 農地利用集積事業は、正にベトナムで推進している事業で、更に強化していかなければならない事業との認識から、日本での学習した知識は大いに参考となる収穫であったと評している。

上述の要点から、ベトナムの農業・農村と比べ、優れている日本の農業生産の実情を良く理解把握していることが伺えた。

ベトナムにおける農業・農村の大きな課題として、農業生産物の流通効率が非

常に悪いことを指摘していた。そのため、農産物の大規模な流通革新を進めたいところである。

しかし、現実のところ、ベトナムの生産規模や市場規模が小さいことから、どのように革新を進めれば良いのかあぐねている。けれども、農村振興を促進するためには、その改革を進めていかなければならない重大課題の遡上のひとつに挙げていた。

日本の優れたシステムを導入するため、研修員は諸々の革新を進めていく必要があると考えているが、ベトナムでは党や行政の法律に基づく方針決定が優先される実情があると言及していた。

13. おわりに

トータルで18日間の研修期間であったが、ジェネラルオリエンテーションや土・日曜日などを除くと、正味8日間という短い期間であった。その中で、可能な限り「農村振興」のテーマに沿った講義や施設見学を織り込んだ。

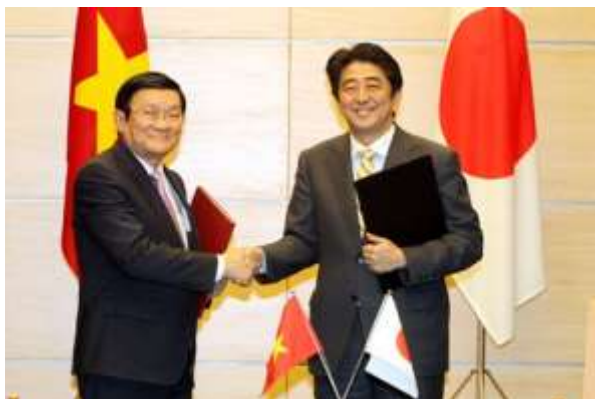
その結果、評価会や研修員の感想でも分るとおり、非常に満足すべき成果が得られたと自負している。

ベトナム農村振興コースは、昨年度に引き続きと二度目の実施の切っ掛けを活かし、ベトナムの農村振興に関わる「草の根技術協力事業」の実施に結びつくような案件を企画するため、現地調査や研修員と協議していく考えである。

最後に、本研修「ベトナム農村振興コース」の遂行にご支援・ご協力を頂いたJICA 北海道の松島正明所長をはじめ、担当の小田切清治様および成田望美様に厚く御礼を申し上げます。また、本研修の実施に当たり、北海道庁や中央農業試験

場をはじめ、石狩農業改良普及センターによる講義や施設見学、ホームステイにご協力を頂いた道央農業協同組合や道央農業振興公社、農家の皆様方に心から謝意を表す。

更に、本研修に参加し、熱心に受講された研修員各位と研修監理員の一宮俊様および Pham Quang Minh 様の両人に厚く御礼を申し上げます。



米の収穫

稲の刈り入れ



ベトナム山岳地帯のライステラス



ベトナム地図



長堤の改修